

選評

山形美有紀

ハンス・メモリンク 《ジャン・ド・セリエの二連板》

——聖ゲオルギウス弩手組合と騎士道——

本論文は、ハンス・メモリンクの《ジャン・ド・セリエの二連板》の図像を、注文主である香辛料商人ジャン・ド・セリエの社会的・文化的背景にもとづき分析するものである。注文主とされるジャン・ド・セリエは、ブルゴーニュ宮廷における有力貴族の姻戚であり、山形氏によれば、市民階級に属しながらも騎士道文化に傾倒していた。そして、メモリンクの作品は、騎士道の実践者としての注文主の自己表象を絵画化したものとする。

山形氏の論考において核になるのは、ジャン・ド・セリエがブルッヘ市の聖ゲオルギウス弩手組合の構成員であったという点である。この史実はヤンセンスによる先行研究によって既に指摘されているが、山形氏はその指摘に立脚して図像解釈を進める。作品右パネルの背景に描かれた聖ゲオルギウスは、従来の研究では注文主の親族に関するものと考えられているが、山形氏は聖ゲオルギウスを守護聖人とする弩手組合におけるジャンの活動に結び付ける。さらには、聖女に囲まれた聖母子に向かって跪く注文主の姿を、騎士道の実践者としてのジャンの自己表象とする。なお、右パネル背景に描かれたもう一人の聖人である福音書記者ヨハネについては、洗礼者ヨハネと並ぶジャンのもう一人の守護聖人であるという解釈が提示されている。注文主の同定など議論の前提となる条件についても関係するため、背景の二聖人についての以上の指摘は興味深いものがある。

論証の過程においては、「聖女に囲まれた聖母子」の図像源泉や、画中に表現された植物モチーフの意味解釈、描かれた楽器の選択、祈念用二連画としての機能など、多様な論点がとりあげられ、想像力豊かな分析が加えられている。個々の議論の整合性に幾分の粗密はあるが、自説を補強するために広範な議論を行うことによって、全体として大変に魅力ある解釈を提示することに成功している。作品に関連する一見雑多な諸要素を、一編の論文としてまとめあげる筆力については、大いに称賛されるべきものであろう。

騎士道という文脈における対象作品の読解にはさらなる検討の余地も残されているが、論文全体として新たな解釈の可能性を巧みに打ち出しており、今後の議論を大いに活気づけることが期待できる。全編を通じて文章は読みやすく、細部に意味を読み込む図像解釈的な面白みも備えた論文である。以上により、山形美有紀氏に『美術史』論文賞を贈り、その努力と功績を称える。